余市町歴史体験ガイド

時を超えてよみがえる
先人たちのメッセージ

北海道余市町

ソーラン節発祥ものがたり

在りし日のにぎわい　歴史を伝える波音を耳に

ソーラン節発祥之碑からローソク岩を望む

正調ソーラン節

ハドッコイ
〈エンヤーレンソーラン
ソーラン
ソーラン〈ハイ〉
〈鰊来たかと　鴎に聞けば
わたしゃたつ鳥　波に聞けチョイ
ヤサエーンヤーンサーノ
ドッコイショ
ハアドッコイショ・ドッコイショ

余市町の歴史は北海道の日本海沿岸の市町村と同様、ニシン漁によって始まった。とくに余市町は江戸時代からニシンの千石場所として栄えてきた町である。

先住民の漁場ユナイのコタン（湯内・現余市町豊浜）に、初めて和人が漁場を開いたのは十八世紀末のことだった。当時、アイヌは熊や鹿を追い、渚で漁をする生活であったが、和人との交易で得られる品が必要となり、蝦夷地の産物を生活必需以上の漁猟により依存するようになる。そして和人自らが漁場に入って来るに従い、アイヌは漁場で雇われ使役されるのであった。記録によれば、アイヌは岸辺に来たニシンをタモ網ですくったとあり、押し寄せるニシンをとるのは容易だったと思われる

文政三年（一八二〇）、初代竹屋林長左エ門が漁場を請負うことにより、道南からの入稼ぎ漁夫が定着するようになる。

ニシン漁は漁網の改良により、笊網が使用され、十九世紀中頃、行成網の導入によって網漁法が大きく変わる。その後明治二十年代に入り角網の導入によって、漁獲量が増加し、各地において漁家が経済力をつけ、宏壮なニシン番屋が日本海沿岸各地に建ち並ぶ。

いま、江差追分節とならび全国で愛唱されるソーラン節は、このニシン漁とともに生まれ育った作業唄である。

いずれにしても、ニシン漁は漁夫の大量動員によって成り立っており、毎年東北方面（青森・秋田・岩手）から「やん衆」と呼ばれる漁夫が来道した後、三月彼岸の中日を前後して一斉に網入れが行われるのである。

気合いを掛ける船頭の合図は人によって違うが、大声で「起せ」または「ノタッ」という声により網の口が開められ、起し船で待機していた漁夫が網を起しはじめる。

そして、ニシンを揚げるには大きなタモで枠船から汲むため、皆で気を合わせなければ出来ない作業だった。

大タモにニシンを入れるこの作業は、重くて大変な仕事であるため、漁夫数人が「やしゃ鉤」（木の股を形に残した二・三尺の鉤）を持って網に引っかけて引き上げる。この時力を合わせる仕事の拍子をとるために唄われたのがソーラン節である。

この唄には出船のときに唄う「船コギ音頭」（帰船のときにも唄う）、大きな網に入ったニシンをだんだん手繰りながら狭めて、汲み出しを良くするために網を起こしていくときに唄う「キヤリ音頭」、網にニシンの大群が乗って起こしきれなくなったとき、威勢をつけるために唄う「ソーラン音頭」、網を上げてからその網についた数の子を打ち落とすときに唄う「子タタキ音頭」などがある。

これら一連の作業唄を総称したものが、いわゆる沖揚げ音頭だが、発祥についてはこれといった文献はない。が、津軽方面の漁網の掛け声「ソーラン、ソーラン」あるいは南部の「荷上げ木遣り唄」など数多くの作業唄が、本州各地から来道した「やん衆」たちによって持ちこまれ、いつのまにかニシン場の中で一つの物に形づくられたのがソーラン節の発祥といわれている。

このようにソーラン節はニシン漁労とともに生まれ育てられ、北海の怒濤と闘う漁夫の汗からにじみ出た労働歌である。寒風と波しぶき、そこに踊る銀鱗、北国に住む者のみが知る力強さを表現するこのソーラン節は、往年のニシン漁労を後世に伝えるべく唄いつがれることだろう。

現在は、ソーラン節を後世に伝えるために発足した「正調ソーラン沖揚げ音頭保存会」と、このニシン漁労を太鼓によって情景豊かに表現する「北海ソーラン太鼓保存会」が、ソーラン節の文化継承を目的として活動を行っている。

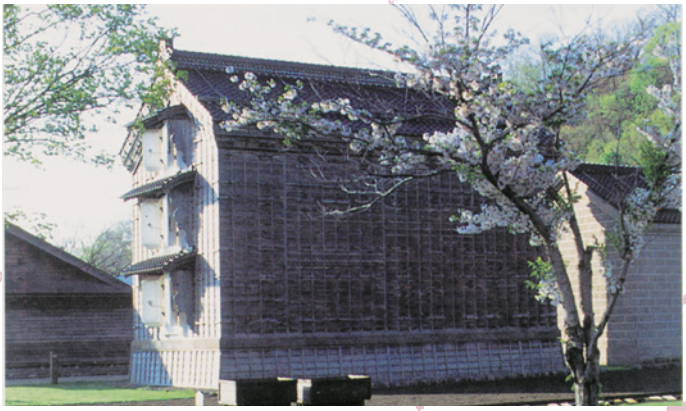
発行元 連続テレビ小説「マッサン」応援推進協議会　事務局 余市町役場経済部商工観光課　H29. 3. 5,000

いにしえからのメッセージ

太古の暮らしや歴史を伝える

いにしえのロマンへと心を誘う…

国指定史跡旧余市福原漁場



史跡指定

昭和57年２月12日	10,732.17㎡
昭和59年８月29日	3,387.88㎡
昭和62年12月25日	1,692.40㎡
計	15,812.45㎡

明治期の漁場経営を知る貴重な遺構

北海道の日本海沿岸は古くからニシン漁場として知られていました。余市は江戸時代からすでにニシンの千石場所としてその名を馳せていました。明治以降、余市はニシン漁とともに発展をつづけ、海岸沿いには漁場の建物が建ち並びました。漁場経営者は「大宅（おおやけ）」と呼ばれ、漁期には出稼ぎの漁夫などの多くの人を雇い、権勢を誇っていました。

旧余市福原漁場は福原家・小黒家・川内家と経営者が代わった漁場の建物のうち、主屋、文書庫、米味噌倉、網倉などを修理・復元したもので、道内でも数少ない遺構のひとつです。

北海道の江戸から明治時代にかけての漁業活動、とりわけニシン漁撈を知ることができる諸遺構がほとんど失われてしまった今日、旧余市福原漁場はその漁業経営を物語る建物がよくまとまって遺存し、明治時代の漁業活動の一端を知るうえで貴重な遺構です。

北海道指定史跡西崎山環状列石

語りかける石・石・石

西崎山は海抜約70m、そこに長径17m、短径12mの楕円形に大小100個ほどの自然石が環状に並べられています。隣接する小樽市の忍路環状列石にくらべ小規模で、年代など詳細については不明な点が多いですが、小さなサークルのひとつがお墓であろうと考えられています。

現在は広域農道沿いの駐車場から遊歩道が整備され、日本海を一望に見渡す景観もあわせて楽しむことができます。

よいち水産博物館

ニシン漁を今に伝える

余市の歴史がひと目で理解でき、豊富な資料を展示している建物としては「よいち水産博物館」とそれに併設する「余市町歴史民俗資料館」があります。

よいち水産博物館は別名「ニシン博物館」。館内にはかつてニシン漁で使われた漁撈具、往時の暮らしぶりを伝える生活用品など、今では見かけることのなくなった資料が豊富に展示されています。

併設の余市歴史民俗資料館には道指定文化財の天内山遺跡、大川遺跡などから発掘された土器・鉄製品等の考古資料や旧会津藩士入植の資料、アイヌ文化資料も多く展示しています。

国指定史跡フゴッペ洞窟

指定年月日　昭和28年11月14日
　　昭和61年５月26日
指定面積　7,924.43㎡

発見から保存まで

フゴッペ洞窟発見の端緒は、昭和25年（1950年）８月、札幌の中学生だった大塚誠之助さんが海水浴に来て見つけ、兄で札幌南高校郷土研究員の以和雄さんに伝えたことによります。発見当時は子どもが腹ばいになってやっと入れる程度の開口部しかなかったといわれます。その後、昭和26年から28年にかけて、北大名取武光助教授を団長に考古学、人類学、地質学からなる総合学術調査団が編成され本格的な発掘調査が行われました。

この調査で洞窟は、奥行き７m、幅６m、高さ５mほどの広さがあり、厚さ４m以上の遺物包含層をもつことがわかりました。出土遺物は、続縄文時代後半期（約1600～1300年前）の後北C1式、同C２式、北大式と呼ばれる土器や石器、骨角器などです。ほかに石で囲んだ炉跡や炭火木も見つかりました。何よりも人びとを驚かせたのは、爪で傷が付くほど柔らかい砂質凝灰岩の壁に、叩いたり削ったりして描いた刻画が800個もあったことです。四足動物、舟、魚を形どったものから角や翼のようなものをつけた人物像などが、せまい洞窟内に密集しており、調査の結果、北方ユーラシア大陸に広く分布する豊猟（漁）祈願などが行われる聖なる場所であったであろうといわれています。

しかし、この洞窟は岩質がもろく刻画の風化が著しく、また洞窟自体、崩落の危険があるため、昭和47年に日本で最初のカプセル保存方式を実施し、温度・湿度を一定に保つ保存施設が完成し、平成16年に全面改修されました。いまでは古代北方文化を知るための貴重な世界的遺産として、国内はもとより世界各地の学者・研究家などがこの洞窟を訪れています。

国指定史跡重要文化財旧下ヨイチ運上家

重要文化財指定　昭和46年12月28日
史跡指定　昭和48年７月31日
敷地面積　4,192.88㎡

現存する唯一の運上家

江戸時代、蝦夷地（北海道）を支配していた松前藩は米を産しないため、家臣に対して知行の代わりに一定の場所の交易権を与え、アイヌの人たちとの交易による収入を家臣の給与（禄）とする制度をとりました。はじめは知行主が直接経営にあたっていましたが、やがて一定の運上金をとって商人に請け負わせるようになりました。この商人を「場所請負人」といい、場所請負人が場所ごとに建立したのが運上家（屋）です。寛永４年（1792年）には東蝦夷45場所、西蝦夷43場所を数えました。

下ヨイチ運上家は公文書の取り扱いや役人・通行人の宿所、難破船の救助などの松前藩の出先機関のような仕事を代行し、地域の政治・経済を統括・支配する性格をしだいに強めていきました。余市の運上家は、天明６年（1786年）には上ヨイチ場所（余市川右岸）と下ヨイチ場所（余市川左岸）の２ヶ所ありましたが、旧下ヨイチ運上家は、場所請負人三代目竹屋林長左衛門が嘉永６年（1853年）に改築した当時の古図面をもとに復元したものです。切妻造で間口40m、奥行16m。屋根は板柾３千枚、その上に２千個の石を置いています。上手が座敷で役人や勤番下役の止宿所にあてられ、中央は台所と居間、下手には土間や雑部屋を配しています。このような運上家は、道内に数10ヶ所あったとされていますが、現存するのはこの旧下ヨイチ運上家だけとなり、近代北海道の歴史、幕藩体制下の蝦夷地経営を知るうえで貴重な遺構になっています。

文化財施設のご案内

区分＼施設名		フゴッペ洞窟 ☎(0135)22-6170	旧下ヨイチ運上家 ☎(0135)23-5915	余市水産博物館 ☎(0135)22-6187	旧余市福原漁場 ☎(0135)22-5600
開館時間		午前９時～午後４時30分			
入場料	個人	大人　300円　小人　100円			
	団体	大人　240円　小人　80円（団体は20名様以上）			
	共通入場券	４施設見学共通入場券：大人／880円　小人／320円			
休館日		毎週月曜日・祝祭日の翌日・冬期閉館（12月中旬～４月上旬）			
交通機関		余市町栄町　中央バス フゴッペ洞窟前下車　１分	余市町入舟町10　中央バス 余市町役場下車　10分	余市町入舟町21　中央バス 余市町役場下車　10分	余市町浜中町　中央バス 浜中町下車　２分

ゆかりある文人の碑

松尾芭蕉句碑

余市町内の出雲神社境内には「郭公万祢久何麦のむら尾花」という芭蕉の句碑があります。

この句は「芭蕉俳句集」によると百三十一番目の句にあたり、延宝九年芭蕉三十八歳の作であります。明治二十三年三月に建立されており、余市町に現存する句碑としては最も古いものですが、建立者の余市松柏神社がなぜこの句を選んだかは、当時出雲神社境内一帯の丘を「郭公の丘」と呼び、神社で句座を開いたことによるものとされています。揮毫は俳諧結社「教林盟社」社長でもあった、書家・小野素水に請うています。北海道内には芭蕉句碑は、函館、松前、江差、小樽、余市など合わせて七基が現存します。昭和五十五年、余市町文化財に指定されています。

幸田露伴句碑

明治・大正・昭和の三代にわたって文筆活動を続け、日本近代文学史上に大きな足跡を残した文豪幸田露伴は、明治十七年夏、東京芝汐留の電信修技学校を卒業後、築地の中央電信局で実務に従ったあと、一九歳の時に、明治十八年七月、判任官・十等技手として余市に赴任しました。

余市では北国の風物に触れ「余市春望」「余市八勝」などの漢詩を詠んでいますが、明治二十年八月二十五日、官を捨て徒歩で東京に向かいます。その時の記録に「突貫紀行」があります。句碑にはこの露伴の足跡を記念し、昭和三十年に余市郷土研究会が建立しました。露伴の勤務地近くに建てられた碑には「塩鮭のあ幾と風ふく寒さかな」の句が刻まれ、昭和三十一年余市町文化財に指定されています。

旧会津藩士の面影を偲ぶ

開村記念碑

開村記念碑は旧会津藩士団らによる黒川村と山田村への入植五十年を記念して、大正九年に建立されたもので、当時のお金で二千円が投じられたものでした。戊辰戦争で、新政府軍に敗れた会津藩士たちは、東京などで謹慎生活を送ったのち、明治二年に北海道へ向け海路出発、紆余曲折を経て同四年春から余市への入植が始まりました。石碑背面には、明治の初め、巨木が生い茂り、熊が吼え、狐や兎の住処であった大地に「共存自治ノ精神」をもって入植したこと、入植から五十年の節目に当たる年に碑を建立して、後世に「不朽」に伝えようとする決意などが刻まれています。

現在、石碑がある付近は、旧藩士団幹部の住宅や教学所、共同浴場などが建てられていた場所で、通りは「侍小路」の名で親しまれていました。ここを拠点として、余市川両岸の未開地が切り拓かれました。

殉節碑

戊辰戦争の戦後処理のなか、新政府は会津藩に責任を取らせようとしました。会津藩家老の一人であった萱野権兵衛は、自ら進んで責任者のひとりとして名乗り出ることで、会津藩ならびに主君に代わって、切腹しました。北海道に移住した会津藩士たちも「我ら賊臣にあらず、一藩ならびに藩主に代わって渡道した」という一貫した信念を持っていたため、萱野権兵衛の殉節碑を余市にも建てようという声が挙がり、没後六十八年の昭和十二年に黒川、山田村に入植した旧会津藩関係者により建立しました。

■国指定文化財　5件

種　別	名　称	所　在　地	所有者	指定年月日	摘　要
記念物史跡	フゴッペ洞窟	余市町栄町35番地外	余市町	昭28. 11. 14 昭61. 5. 26	昭和25年に発見され、仮装人物・舟・魚等をかたどった刻画があり、考古学上貴重
有形文化財 建造物 重要文化財	旧下ヨイチ運上家	余市町入舟町10番地	余市町	昭46. 12. 28	嘉永6(1853)年の改築といわれ、松前藩が設けた運上屋の中で現存する唯一のもの。近世北海道の歴史、また幕藩体制下のエゾ地経営を知るうえで貴重な遺構。 敷地内は、全盛期の池庭等の旧状をよく残している。
記念物史跡	旧下ヨイチ運上家	余市町入舟町10番地	余市町	昭48. 7. 31	
記念物史跡	旧余市福原漁場	余市町浜中町150番地外	余市町	昭57. 2. 12 昭59. 8. 29 昭62. 12. 25	明治から昭和初期の北海道漁業の歴史を知る生きた資料。 ニシン漁最盛期の遺構の内で主屋、文書庫、米、味噌倉、石蔵、網倉、便所、物置まで残っているのは大変少ないものである。
記念物史跡	大谷地	余市町登町64番地外	余市町	平12. 11. 20	日本海側の数少ない貝塚として貴重

■北海道指定文化財　2件

種　別	名　称	所　在　地	所有者	指定年月日	摘　要
記念物史跡	西崎山環状列石	余市町栄町	余市町	昭26. 9. 6	昭和25年発掘調査　７基のストーンサークルが密集している。 近隣に関連のあるサークル群あり。
有形文化財 考古資料	天内山遺跡出土の遺物 171点	余市町入舟町 (歴史民俗資料館内)	余市町	昭51. 5. 21	チャシ跡である台地上に貝塚・祭場・墳墓等が存在する複合遺跡で、縄文・続縄文・擦文・アイヌ文化にわたる遺物で大変貴重である。

■余市町指定文化財　34件

種　別	名　称	所　在　地	所有者	指定年月日	摘　要
有形文化財 建造物	茂入神社祭壇及び 吊天井	余市町入舟町 (茂入神社内)	余市町	昭40. 5. 1	旧下ヨイチ運上家と隣接しており、往時の様子を知るうえで貴重。 天保(1835)年間建立。
有形文化財 建造物	川内漁場文書庫	余市町浜中町150-1	余市町	昭53. 1. 12	明治期から大正初期に建築された遺構。往時の鰊漁撈全盛期の北海道漁業文化を知るうえで貴重。現在、旧福原漁場内に包含されている。
有形文化財 建造物	大日本果汁株式会社 (ニッカウヰスキー株式会社工場創立事務所)	余市町黒川町７丁目	ニッカウヰスキー 株式会社	昭55. 2. 19	余市川流域の沼沢地４万５千坪の中に、原酒工場を建設。一大事業達成の原点となった事務所。
有形文化財 建造物	鐘桜門	余市町梅川町 (乗念寺境内)	乗念寺	昭55. 11. 17	明治17年12月落成。 現梵鐘(目方170貫)は昭和23年12月再鋳。
有形文化財 彫刻	薬師如来像	余市町富沢町２丁目21 (永全寺内)	永全寺	昭35. 3. 22	木製の一刀彫刻の立像。容器は木製外部黒漆塗、内部は純金泊、扉両開き。
有形文化財 彫刻	弁財天他３体	余市町入舟町 (茂入神社内)	余市町	昭35. 3. 22	弁財天は文化８(1811)年乙未正月京都の西田専祐の作。他３体(稲荷神・龍神・金比羅神)も同年の作だが作者不明。
有形文化財 工芸品	蒔絵模様両開箪笥	余市町入舟町 (余市水産博物館内)	林　睦朗	昭40. 5. 1	間口三尺五寸、高さ三尺七寸五分、奥行き一寸五分。昭和６(1769)年12月、須藤政右エ門包孝作。
有形文化財 工芸品	鰐口	余市町入舟町 (余市水産博物館内)	余市町	昭46. 12. 18	文久年間(1861～1864)足軽桐ヶ谷多兵衛が願主として寄進したもので、円山裾に所在した稲荷神社から発見された。
有形文化財 工芸品	『波に千鳥』（板戸）	余市町入舟町 (旧下ヨイチ運上家内)	余市町	昭54. 10. 17	江戸末期、加賀地方から弁財船により搬入されたものと伝えられる。
有形文化財 古文書	ヨイチ御場所上下運上 家関係古文書	余市町入舟町 (余市水産博物館内)	余市町	昭40. 5. 1	旧下ヨイチ運上家はもとより、江戸時代の北海道を知るうえで貴重な資料。
有形文化財 古文書	御受書（血判書控）	余市町入舟町 (余市水産博物館内)	余市町	昭63. 11. 18	明治２年９月から２回にわたり小樽に上陸した旧会津藩士が開拓次官樺太開拓使長官黒田清隆に提出した血判書。
有形文化財 書籍	野口雨情書（掛物）２点	余市町大川町７丁目５	舩木一夫	昭51. 5. 24	大正15年８月、釧路・弟子屈方面を旅行した後、余市町に立寄り詠んだものといわれる。余市町を諷詠したものである。
	野口雨情書（掛物）１点	余市町入舟町９	林　睦朗		
有形文化財 書籍	幸田露伴自筆の電報 送達紙	余市町入舟町 (余市水産博物館内)	余市町	昭55. 11. 17	電信技手として余市に勤務した露伴が明治19年12月19日着信し処理を行ったもの。
有形文化財 典籍	東開和尚筆達磨絵	余市町富沢町２丁目 (永全寺内)	永全寺	昭56. 1. 16	元永全寺住職、雅号を「楽山」と称し、仏画の名手とうたわれた澤辺東開和尚(嘉永元〈1848〉年生)直筆の達磨絵。
有形文化財 典籍	日像菩薩御本尊銘の 掛軸	余市町沢町 (法華寺内)	法華寺	昭56. 1. 16	建武元(1334)年の墨筆教文。 幕末から明治初期までの本町の寺社普及の流れを知るうえで貴重。
有形文化財 絵画	湯内漁場盛業鳥瞰図	余市町入舟町 (余市水産博物館内)	永全寺	昭51. 5. 24	沖村ユウナイ場所、小黒漁場を中心にして鰊沖揚げ運搬船、陸廻りなど忙しく立働く様子が描かれている。
有形文化財 絵画	安政年間のヨイチ 鳥瞰図	余市町大川町１丁目133	松平寿朗	昭51. 5. 24	安政年間(1854～1859)余市・岩内間の山間切開きの頃、道路完成状況等を含めた余市の絵図。
有形文化財 絵画	林子平書東邦地図	余市町入舟町 (余市水産博物館内)	余市町	昭51. 5. 24	江戸時代の海防論者である林子平が描いた地図。幕末の数少ない北方地理文献として貴重。
有形文化財 絵画	アイヌ絵 （武者のぼり下絵）	余市町入舟町 (旧下ヨイチ運上家内)	余市町	昭54. 3. 30	源義経が北海道に渡りアイヌの娘と恋をしたという伝説の一場面。作者は松前藩お抱えの絵師・早坂文嶺画。
記念物史跡	芭蕉句碑	余市町沢町５丁目 (出雲神社境内)	余市松柏社	昭55. 11. 17	町内に現存する句碑として、また年代的にも最も古く、道内芭蕉の句碑としても稀である。
記念物史跡	桐ヶ谷太兵衛 建立地蔵尊	余市町沢町５丁目 (法隆寺境内)	法隆寺	昭40. 5. 1	安政４(1857)年、江戸は目黒の出身桐ヶ谷太兵衛が余市・岩内間の道路開削工事の安全を祈願して建立したものといわれる。
記念物史跡	庚甲塚	余市町豊浜町	豊浜町有志	昭40. 5. 1	高さ2m、幅1.5m。現在でも年に一度は豊浜有志による祭典行事がある。
記念物史跡	茂入山城跡	余市町入舟町 24・29・35番地	片岡リエ	昭35. 3. 22	道内では珍しい城塞遺跡として貴重。築造は三百数十年前といわれる。
記念物史跡	文豪幸田露伴句碑	余市町浜中町238 (北海道立中央水産試験場内)	余市郷土 研究会	昭31. 7. 20	幸田露伴が電信修技校卒業後、最初に赴任したのが余市町であった。 それを記念し、勤務先の電信分局跡地隣に句碑を建立した。
記念物史跡	旧ヤマウス稲荷社 石垣階段	余市町港町231	余市町土地 開発公社	昭51. 5. 24	西海岸鰊漁における、江差・松前地方文化との関連において数少ない重要な文化財。
記念物史跡	川内漁場敷地	余市町浜中町150他	余市町	昭53. 1. 12	文書庫と共に鰊漁場経営を知るうえで極めて貴重。
記念物史跡	旧ヨイチ・ユワナイ間 山道餘市口	余市町浜中町	余市町	昭54. 10. 17	文化６(1809)年、陸路交通の便をはかるためイワナイ・古宇・ヨイチの各漁場請負人に命じて切開いた山道の余市口。
記念物史跡	旧今邸園	余市町沢町350	余市町	昭62. 10. 19	和洋折衷の擬洋風建築。庭は廻遊式蓬莱園で、一部に枯山水式の組石があり、道内では数少ない名園。
記念物史跡	奇岩ローソク岩	余市町潮見町前海上	国	昭35. 3. 22	ニセコ積丹小樽海岸国定公園の内にあり、高さ46m。岩質は集塊岩。
記念物史跡	奇岩えびす・大黒岩	余市町白岩町前海上	国	昭35. 3. 22	新第３紀末～４紀の那須火山帯が生出した自然の芸術。岩質は集塊岩。
記念物史跡	開村記念碑	余市町黒川町７丁目	余市会津会	平18. 12. 21	旧会津藩士団の余市入植50周年を記念して、大正９(1920)年にその子孫たちにより建立。教学所などの主要施設があったとされる「会津共有地」に立つ。
記念物史跡	シリパケールン群遺跡	余市町梅川町	—	昭35. 3. 22	シリパ山の南西向きの斜面にあった積石。昭和32年発掘調査が行われたが、詳細は不明。
記念物 天然記念物	神木サイカチの木	余市町富沢町14丁目 (余市神社境内)	余市神社	昭40. 5. 1	本州～九州方面に多く、北海道での自生は他に例がない。樹齢約300年。 樹高17m。

りんご発祥のまち・余市

今から126年前、余市の山田村にリンゴが実りました。

余市で初めて実ったリンゴは最初、19号、49号と番号で呼ばれたアメリカ産の品種でした。1872年（明治5年）、北海道開拓使はアメリカミシガン州からリンゴ、西洋なし、ぶどうなどの果樹の苗を輸入し、七飯開墾場（官園）で育てた後、同8年に札幌、有珠、余市など道内各地に苗木が無償で配布されました。余市へは同8年に500本が各戸に配布されましたが、それらを受け取った人たちはあまり関心を示さなかったといいます。

4年後の同12年には、会津藩士であった赤羽源八宅と金子安蔵宅の庭先のリンゴが遂に実りました。赤羽宅からは19号6個が、同じく金子宅から49号7個が収穫されました。

▲余市リンゴのラベル

翌年もリンゴは結実し、『余市小史』によると1本の木から50㎏弱ほども収穫できるようになり、札幌で開催された農業博覧会に出品され好評を博しました。リンゴ1貫目（3.75㎏）で白米4升ほどのよい値段で取引されたリンゴ栽培は徐々に軌道に乗り出しました。

リンゴの名前は19号が「緋の衣」、49号が「国光」と名付けられました。「緋の衣」は幕末に京都守護職となった会津藩主、容保公が孝明天皇から頂いた「緋の御衣」（緋色の布）にちなんだものでした。

容保公は朝廷の伝統的な権威をかかげて弱くなっていた幕府の再強化をはかる公武合体運動を進め、孝明天皇もそれに賛成の立場をとっており、「緋の御衣」の赤い色は天皇への忠誠の証であり、会津藩士の誇りの色といえるものでした。

しかし、戊辰戦争に敗れた会津藩は一転、逆賊の烙印を押され、江戸での謹慎をへて200戸余りの藩士団と家族らは開拓のため、北海道（オタルナイ）に上陸します。当初は樺太移住が予定されていましたが変更となり、移住先が決まらないまま1年半もの間オタルナイに滞在を余儀なくされます。

その後、開拓次官黒田清隆の力によって余市への入植が決まり、開墾が始まりましたが慣れない作業に苦難の連続でした。明治4年の入植から8年後に実ったリンゴの赤い色に、「緋の御衣」を重ねた入植者達の胸中に去来したのはどんな思いだったのでしょうか。

琥珀色の体験「ウイスキー博物館」

赤い屋根と石造りの工場や貯蔵庫のたたずまいが、スコットランドの古城を憶わせるニッカウヰスキー余市蒸溜所。この工場は1934年（昭和9年）に建設され、1936年（昭和11年）にウイスキー製造を開始しました。

創始者である竹鶴政孝は1918年（大正7年）、25歳のときにウイスキーの製造法を学ぶため、第一次世界大戦の最中に単身スコットランドに渡りました。「スコットランド魂」といわれるウイスキーの蒸留法は秘伝であり門外不出でしたが、日本でウイスキーを製造するという政孝の情熱が受け入れられ、その技術を習得していくのでした。そんな高い志を抱きながらも政孝は孤独でした。彼の留学生活を支えたのは、厳格なスコットランドの家庭に育った感受性豊かな心優しいリタでした。やがて二人は周囲の反対にあいながら、困難を乗り越えて1920年（大正9年）の春、登記所で届け出だけの結婚をしました。

そして「良いウイスキーは良い自然がつくる」という信念のもと、品質と伝統的なウイスキーづくりを求め、たどり着いたのが余市でした。積丹半島の海、オゾンに満ちた冷涼な空気、水量豊かな清流、この余市こそ良質のウイスキーを生み出す自然の恵みに溢れた理想郷だったのです。ウイスキー博物館は、無色透明であるウイスキーが樽での熟成により、美しい琥珀色になる過程や政孝とリタ夫人の国境を越えた愛の軌跡を紹介しています。

余市町歴史体験ガイドマップ

❶よいち水産博物館
❷旧下ヨイチ運上家
❸旧余市福原漁場
❹フゴッペ洞窟
❺西崎山環状列石
❻ニッカウヰスキー余市蒸溜所
ウイスキー博物館
❼文豪　幸田露伴　句碑
❽松尾芭蕉　句碑
❾殉節碑・開村記念碑